



PHILIPP
RTYKA
ET
OPIUM

「Opium」

Filip Phillip & Ed Partyka Dectet

ウィーン交響楽団のパーカッショニスト、フリップ・フィリップによるジャズ・プロジェクト。超絶ヴィブラフォンと金管楽器、乾いた打楽器による琥珀色の風景描写。中欧ウィーンから望む遠きアメリカ、そして中東の香りも。クラシックだけではなく、ウィンナー・ジャズシーンの懐の深さを感じることができる好盤。



「This Is the Slow Club」

The Slow Club

ウィーン音楽プロデューサー、トーマス・ラビッシュと鬼才エンジニア、ディーツ・ティンホフのチームが手がけたこのアルバムは、英米ふうというならばフォークロニカと表現するのもかもしれない。深みのあるヴォーカル、陰影のある美しいサウンドスケープ、緻密なアンサンブル……完成度と個性に打ちのめされる。

左上/天才肌のミキシング・エンジニア、ディーツ。「アレンジをお願いした『Jubilee (ジュビリー)』という曲を最初に聴いたときは“スピーカーから風が出た”」 右上/ウィーン交響楽団のパーカッショニスト、フィリップ。「音楽的な様々なアドバイスをもらっています。唯一の音楽の師匠かもしれない」 左下/2006年レコーディングをともにした仲間であり、スタジオのオーナーでもあるオリバー。 右下/ウィーンっ子が通うオペラハウス「フォルクスオーパー」の専属歌手である平野和さん。岸田さんとの対談のなかで、ドイツ語で歌う難しさとやりがい話を話してくれた。「ウィーンでオペラ歌手を務めるのは間違いなく天才でないといけない。平野さんは、才能と自信が気負いなく重なり合っている感じがしました」

たちは一生の友人になった。

横浜のコンサートには、かつて一緒にウィーンを旅して、音楽の世界をともに目指した友人を呼んでいた。彼との旅ではクラシック音楽はもちろん、ジャズやロックなどジャンルを問わず聴きまくった。そして忘れもしないウィーン・フィルのニコラウス・アーノンクール指揮、モーツァルト40番と41番。ジャンルにこだわり、音に凝ることばかり考えていた僕の考えが変わった旅。でも帰国後はクラシック音楽とロック、バイトしながら市民オーケストラで演奏を続ける彼とバンドで演奏する僕。その生き方の違いによってやがて疎遠になっていった。そんなある日のことだった。「アイツのじゃないのか!」東中野のしがないリサイクルショップに、ヤツのヴァイオリ

ンは安価な値札とともに陳列されていた。もう音楽をやめてしまったんだと途方に暮れた——。

気がつくと僕は7年ぶりにウィーンに来ていた。横浜のコンサートを開ききっかけとなった、ヨーロッパにおけるもう一つの故郷。ここウィーンで、バンドのメンバーとアパートを借りてレコーディングをした。音に精通したミュージシャンだけでなく、ウィーンという街がもつ心地よさが難解な作業をも軽くして、仲間と一緒に創り上げる歓びを思い出させてくれた。何よりも一生の友人ができたのが大きかった。そのレコーディングをともにした人びとを横浜に呼んで、あのコンサートは実現したのだ。ウィーンに来たのは別の理由もあった。交響曲の作曲をしていて、そのヒントがほしかった。そしてなによりも彼らに会いたかった。



サッカードをしていたアリアの息子が突然ピアノを弾き始めた。買ったことはなく、耳だけで弾き方を覚えたのだとか。

空港を出た瞬間、目の前に滑り込んだ。隣には19歳の息子が乗っている。名門ウイーン交響楽団のメンバートは思えないような格好。さすが音楽と旅と酒、人生を愛する男だ。「シゲル!」すぐ会いたいからだよ。興奮して先週からずっと呑んでるよ!「ハハハ!」さっそく行きつけのホリケで、シュトルム (Sturm, 葡萄がワインになる発酵途中の段階のワイン) で乾杯する。ウイーン・シュニッツェルとクラウシェは、3か月間暮らしたウイーンの前を味覚から蘇らせた。

「元気が?」前に一緒に旅をしたウイーンに来ているんだ。いさなり残念なニュースがある。添付したセクシーなカクテルちゃんほしがいない。ソフアと結婚しちゃったよ。彼女は小さなオーケストラだけ音楽を続けている。楽器はお前と同じウイーンだ。じゃあ、気が向いたらまたメールするよ——僕はかつての友人に向けて数年ぶりにメッセージを送った。

ここが音楽の都たるゆえんを理解するのは簡

単だ。大小どこでもいいからコンサートホールを訪ればいい。非日常的な豪華な空間、響き合う音のすばらしさ、高揚とした客の様子、コンサート後に立ち寄るカフェでの会話、すべてにどこにはニューヨークやロンドンに住んだこともあり、その時代のメインカルチャーの音楽も通った。うさでウイーンに戻ってきてスタジオをやって、スタジオの心地よい抜け感の理由は、パトリックのそんなパツククラウンにもあるのかもしれない。ウイーンで鳴っている音は決してクラシックだけではない。

ミヒの息子がオーストリアでくれた歌劇場「ゾルクスオーパー」で唯一の日本人ソリストに会った。ドイツ語の発音は難しい。ましてやオペラ歌手として本場で認められるのは、並大抵の努力ではできない。彼は言語の才能はないと言っていたけれど、発音には絶対の自信もっていた。歌うこと話すことは基本的に違っていて、歌うときは開口母音や閉口母音など一つひとつすべて把握してやっている。[当然最初はありましたし、えたくらいだ。俺にとっても君の仕事は刺激何も変わっていない。またアプロクダの機材が増えた。]「シゲル!」これはオリアーにも再会できた。久しぶりにスタジオをしたウイーン・バック・スタジオのパーティック・アルバム「ワルツを踊れ」に結実した。録音作業が、3か月暮らしたのが2006年。濃密な時間は状況と街がもつ弛緩した空気感を一発で気に入った。隙間があつて心地よい。音楽が身近にあるウイーンの路地はパリやロンドンにはないゆるやかに、少しお洒落もして睡きにいくものなのだ。は聞かされるものではなく、じっくりと時間を費やして、少しお洒落もして睡きにいくものなのだ。

ウイーンは音楽とにもある。音楽が特別あり、その時代のメインカルチャーの音楽も通った。うさでウイーンに戻ってきてスタジオをやって、スタジオの心地よい抜け感の理由は、パトリックのそんなパツククラウンにもあるのかもしれない。ウイーンで鳴っている音は決してクラシックだけではない。

大変でした。でもウイーンを舞台に世界に出て